

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 学 術 ）	氏名	王 楽
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">近代日本絵画における風景画の成立とその特質 —名所絵から「無名の風景」への変遷を通して—</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	内田 雅三	
審査委員	教 授	菅村 亨	
審査委員	教 授	一鉄田 徹	
審査委員	准教授	蜂谷 昌之	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、名所絵から「無名の風景」への変遷を風景表現の近代化と見なし、「無名の風景」が振興した要因を明らかにすると共に、「無名の風景」が風景画へと確立された経緯を踏まえて明治期から大正初期における風景画の諸相や展開を明らかにすることで、近代日本絵画の風景画の特質を導き出すことを目的としている。</p> <p>本論文は、序章と結章を含め5章で構成されている。</p> <p>序章「問題の所在」では、研究の目的と先行研究の状況について述べている。</p> <p>第I章「日本における風景表現の展開」では、平安時代から江戸時代にかけての風景表現を概観し、日本の風景表現が「名あるところ」を描いた名所絵によって展開されたことを明らかにしている。歴史的には、成立期の名所絵は名所が特定の場所として描かれたのではなく、春の野を描いた絵を春日野と見立てるように、本来そこにはない虚構の風景を表している。また15世紀頃からは、中国水墨画の伝統を取り入れることで、実在する名所を再現的に表現する制作を試みている。さらに18世紀、西洋絵画が日本にもたらされることで、実景描写による日本の風景表現は西洋の写実画法によってある種の現実感を増していった。しかし当時の画家たちは、主に蘭書に描かれた図譜を頼りに独学で西洋絵画の知識を学んだため、絵画表現の研究においては理論的な面が中心となっていた。そのため対象となる風景を写実的な明暗や陰影で表し、また現実の場所を写しているにもかかわらず、作品に現実感が欠けた表現となっている。一方、銅版画や浮世絵版画は、名所絵の視点から名所と日常的な風景との融合や、夕立や霧といった日本の自然の表情を捉えた新たな要素を取り入れるものの、類似化された画面構成は風景表現を共通のイメージによる一種の形式化されたものへと化しており、さらにその主題も名所旧跡に集約している。このように江戸時代までの風景表現が、対象に対する一定の写実性はあるものの、基本的に口伝や粉本といった伝統的な様式から依然として脱することが出来なかったことを明らかにしている。</p> <p>第II章「〈無名の風景〉への変遷過程」では、名所絵から「無名の風景」への変遷を主に絵画形式の変化と自然を見る意識の変化の2つの側面から捉えている。それにより、明治20年から30年頃にかけて名所絵が衰退し、「無名の風景」が顕著に現れ始めたことが、(1)</p>			

工部美術学校及びフォンタネージがもたらした絵画形式による影響、(2) 風景意識の変化による影響、(3) 体験的原風景の喚起、(4) 社会的背景の影響、(5) 用語としての「風景画」の現れ、という5つの要因によるものとしている。

第Ⅲ章「明治期における風景画の諸相とその展開」では、現存する明治美術会や白馬会の展覧会出品作品に加えて、内国勸業博覧会展示作品や関連作品についても考察している。そして明治期における風景画の諸相を、①人と調和した風景、②安定した画面構成による風景、③「外光派」の影響による風景、④「構想画」の意味、⑤幻想的、伝奇的傾向が見られる風景、⑥装飾的傾向が見られる風景、⑦「意味的要素」を持つ対象が描かれた風景、の7つに分類している。これらにより、明治期の風景画の主題を大きく、(1) 眼の前にある対象をそのまま描いた絵画、(2) 対象を通じて特定の説話的内容を描いた絵画、の2つに分けて捉えている。そして近代社会における個人の在り方の変化や自由を尊重する自我意識の昂進は、既成の美学や習慣的なものの見方に捉われない自由な視覚を助成させると共に、西洋美術の系統化された理論による表現主義の潮流、及び表現方法の自由な選択により、画家が風景描写に独自性を見出したことが示された。さらに明治期から大正初期における風景画の展開が、自然の一斑を描いた「みたまま」の風景画から、画家の「内的人間性」を表す特定の説話的内容を持つ風景画へと変化したことを明らかにしている。

そして、結章「近代の風景画の特質」では、第Ⅱ章、第Ⅲ章で整理した特質や諸相を踏まえて、(i) 偶然性の利用、(ii) 多重なる意味の附加、(iii) 表現による印象の差異、(iv) 鑑賞者との連携、という4つの近代における風景画の特質と可能性を導出している。

以上のように、近代において西洋からもたらされた美術に関する思想や技術は、風景画における多様な造形要素や表現技法の自由な選択を超えて、主題や場所に制限されず対象を描く特定の説話的内容を持つ風景画を成立させたと結論づけている。

本論文は、以下の3点において評価できる。

(1) 名所絵から「無名の風景」への変遷に関しては、その要因を文学の影響、時代背景、さらに「風景画」という用語の成立など様々な領域に拡大し、これまでにない多様な視点からアプローチすることで、名所絵の衰退及び「無名の風景」の振興した要因に新たな見知を加えた。

(2) 明治期から大正初期の風景画に関する従来の研究は、主に個々の作家論を中心に行われていたが、本論文は近代日本絵画史における風景画の広範的な意義という視点から先行研究の不備を補った。

(3) 多様な作品分析を通して明治期の風景画の諸相を独自の視点によって7つに分類し、さらに、それらを2つの主題にまとめた。最終的に「近代の風景画の特質」で示された4つの特質と可能性は、どれも示唆に富むもので、今後の風景画の研究に大きく寄与できるものと考えられる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(学術)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成29年2月6日

